(6) 沢 乙 遺 跡

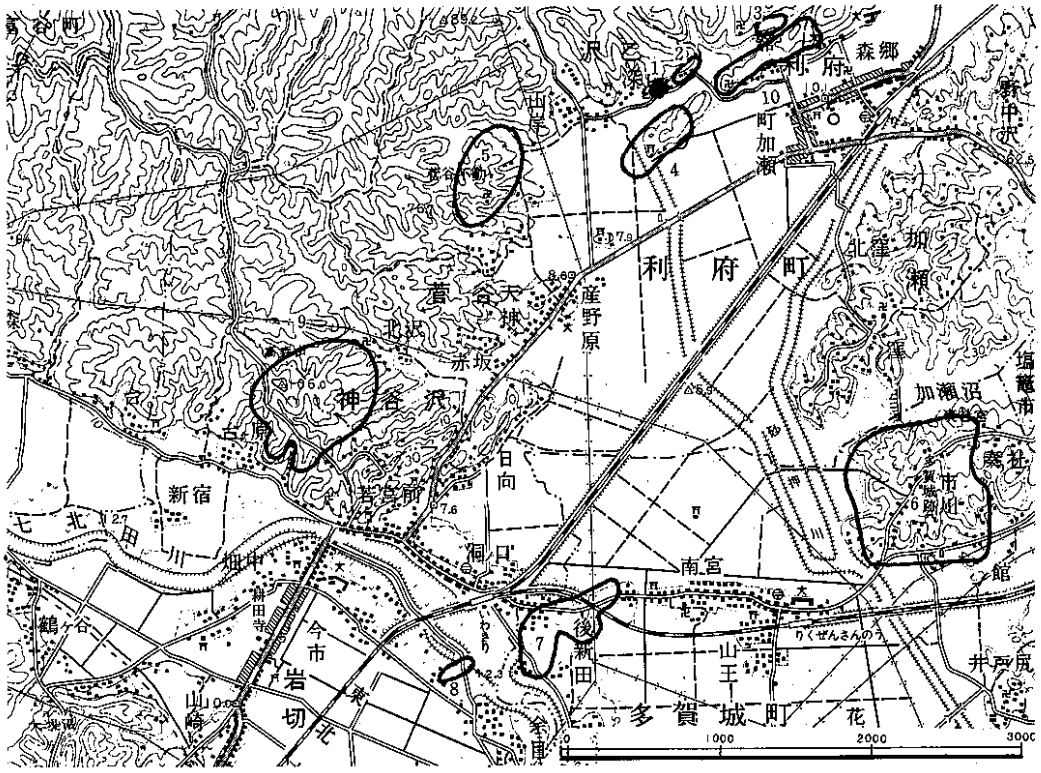
遺跡所在地：利府町沢乙字熊野堂
調 査 期 間：11 月 1 日～11 月 27 日
調 査 面 積：約 145m^2
発 掘 面 積：約 145m^2
遺 跡 記 号：ＢＹ

1. 遺跡の立地と歴史的環境（第1図）

沢乙遺跡は、宮城県利府町沢乙字熊野堂にあり、利府町の中心部から、東方約1.2kmの沢乙地区に立地する。この沢乙地区は、利府低地の北部、富谷丘陵の東南麓にある。東はせまい谷（水田）をはさみ、利府城のある細長い丘陵と向かい合い、南は仙台平野の水田地帯が広がっている。

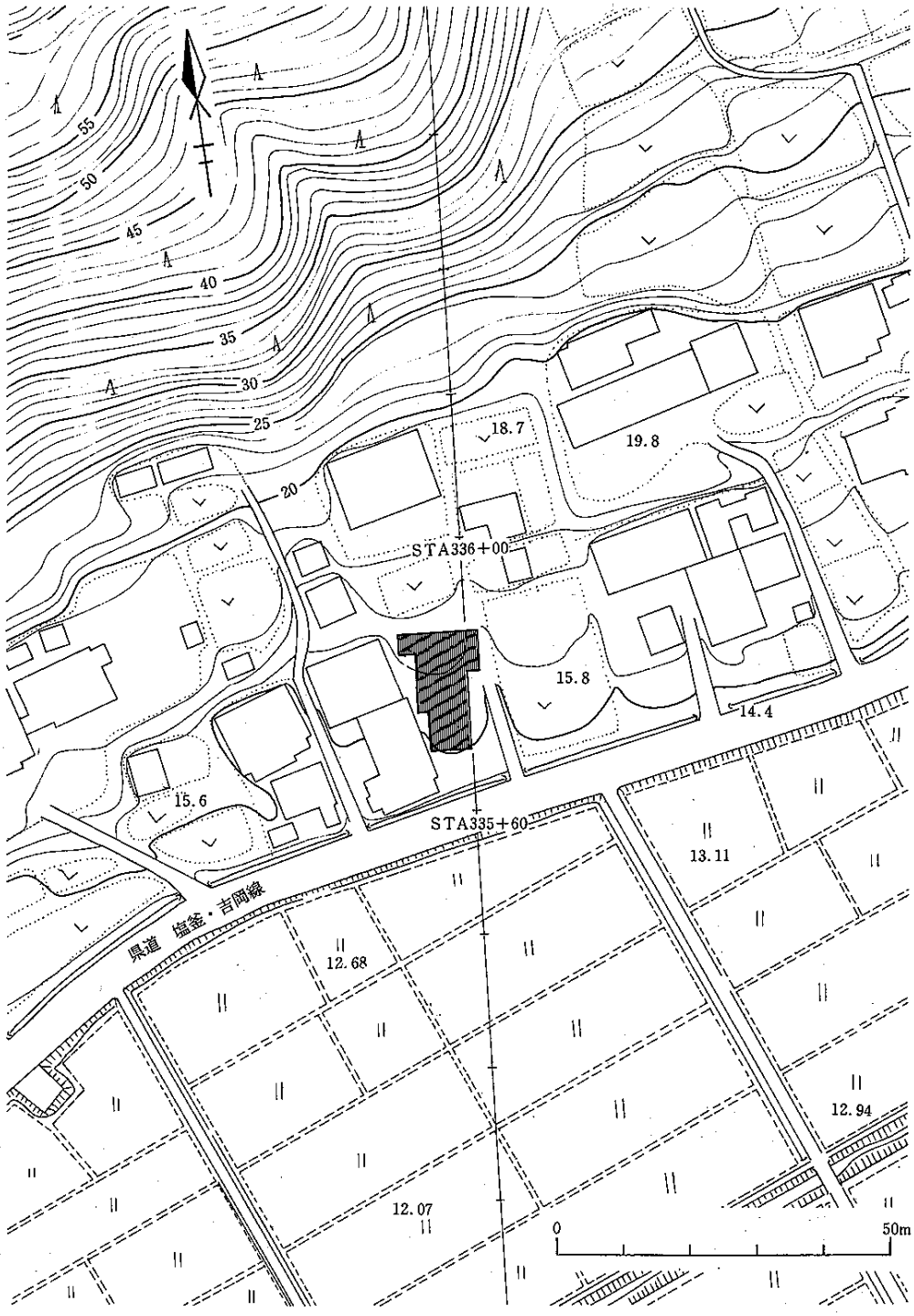
本遺跡は、沢乙地区東部のゆるやかな傾斜地にあり、地目は畑地であった。標高は約16m、南の道路下の水田面との比高は約3mである。周辺はほとんど宅地となっており、遺跡の正確な範囲を把えることはできなかった。

本遺跡の東南方約3.3kmの地点に陸奥国府である多賀城があり、また周辺の丘陵縁辺や自然堤防上には、奈良・平安時代の土師器や須恵器を出土する遺跡が多い。沢乙遺跡の付近にも、館ケ沢遺跡、熊野堂遺跡などがある。また前面の丘陵には、土師器が散布する八幡崎（新幹線

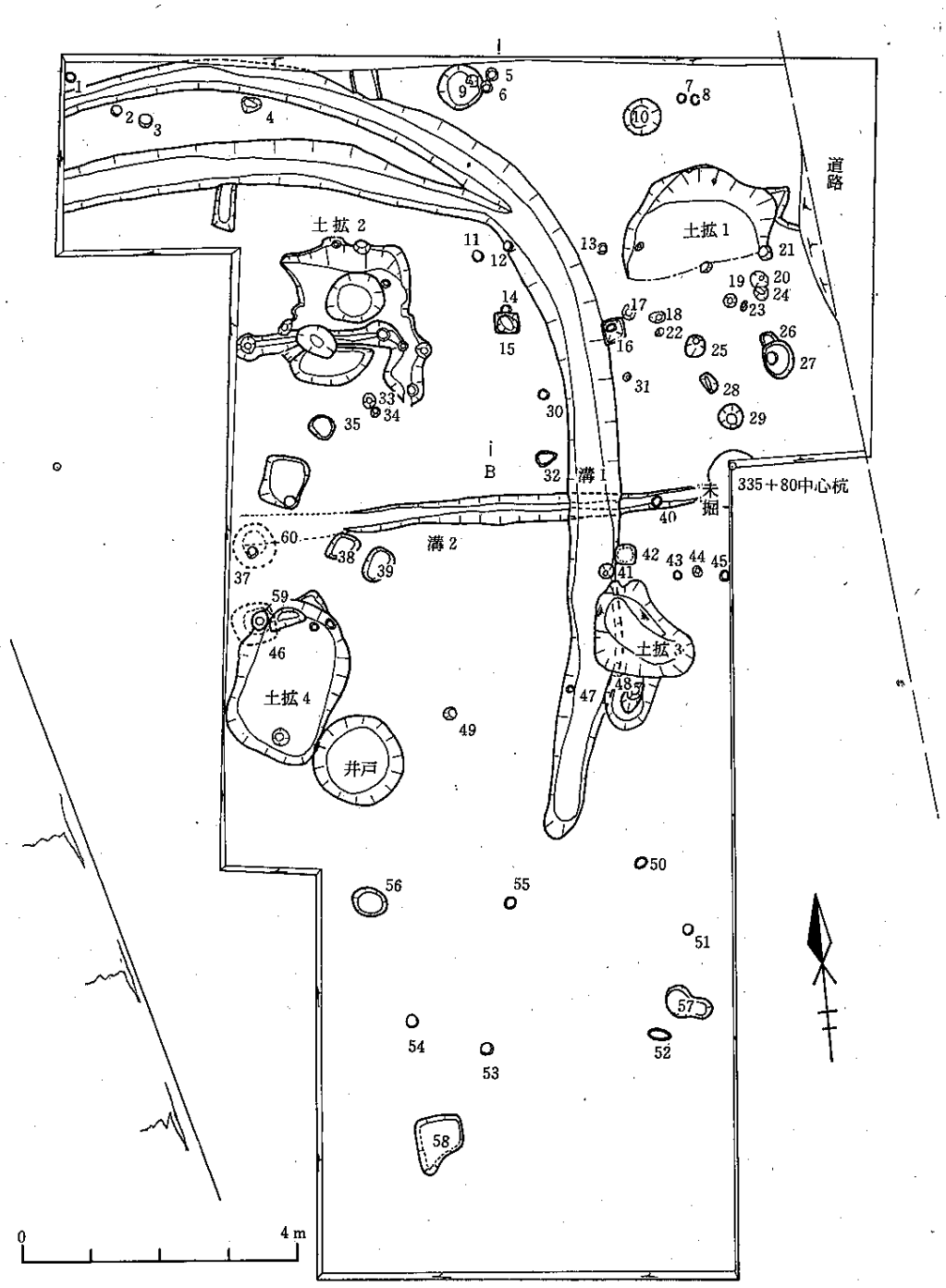


1　沢乙遺跡　2　熊野堂遺跡　3　館ヶ沢遺跡　4　八幡崎遺跡
5　道安寺横穴　6　多賀城跡　7　新田遺跡　8　岩切鴻ノ巣遺跡
9　高森城跡　10　利府城跡

第1図　沢乙遺跡の位置と主要遺跡（仙台5万）


55
50
45
40
35
30
25
20
18.7
19.8
STA336＋00
15.8
14.4
15.6
STA335＋60
13.11
県道　塩釜・吉岡線
12.68
12.94
12.07
0
50m

第２図　遺跡地形図



第 3 図　遺構配置図

工事に先立ち、昭和49年度に調査の予定）や、中世の村岡氏の居城である利府城がある。

2. 調査経過と層位（第2・3図）

路線敷内の東西6m×南北18mの範囲に、新幹線の中心杭（335^{K}80^{m}）を基準として1辺3mのグリッドを設定し、遺構の発見に併い拡張を行ない約145m^{2}を発掘した。

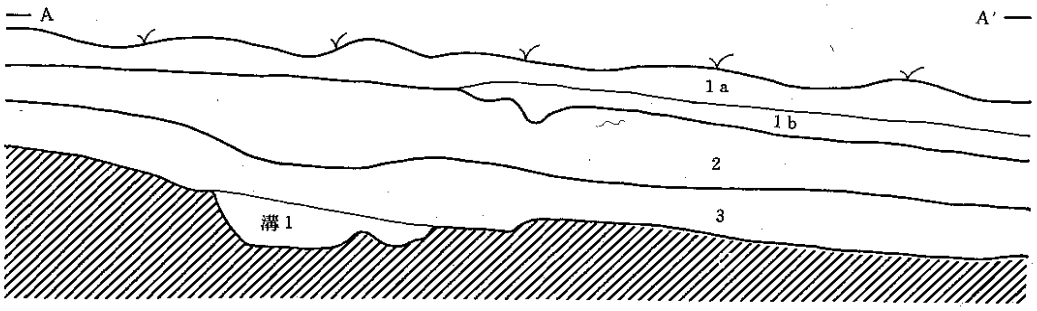
遺跡の基本的層序は、第1層表土、第2層黒褐色砂質土、第3層暗褐色砂質土、第4層褐色砂質粘土（地山）となっている。第4層をのぞく各層に多量の土師器、須恵器の破片が含まれていた。

調査の結果、発見された遺構は、土壙（4基）、井戸（1基）、溝（2本）、および多数のピットである。

遺物包含層（第4図）

第2層は黒褐色砂質土で炭化物を多く含んでいる。層の厚さは平均40cmである。遺物は、多量の土師器、須恵器をはじめ、土製品（支脚）、剥片、瓦、砥石、鉄製品、鉄滓、中世陶器等が出土した。

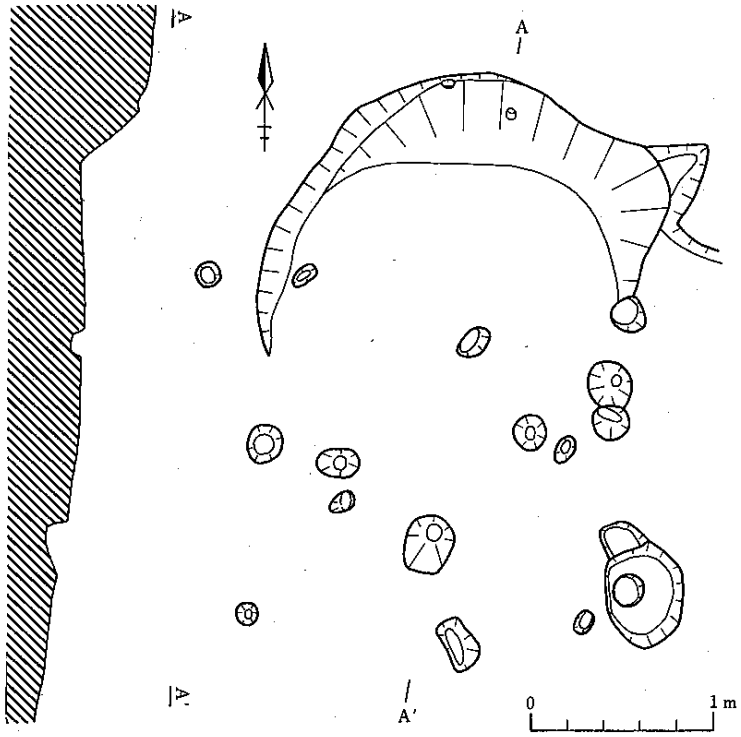
第3層は暗褐色砂質土で第2層とは土色が異なり、明確に区別された。2層と同様、炭化物を多く含んでいる。層の厚さは平均30cmである。遺物は、多量の土師器、須恵器をはじめ、縄文土器、瓦、砥石および灰釉陶器などである。両層とも、土器はすべて破片である。



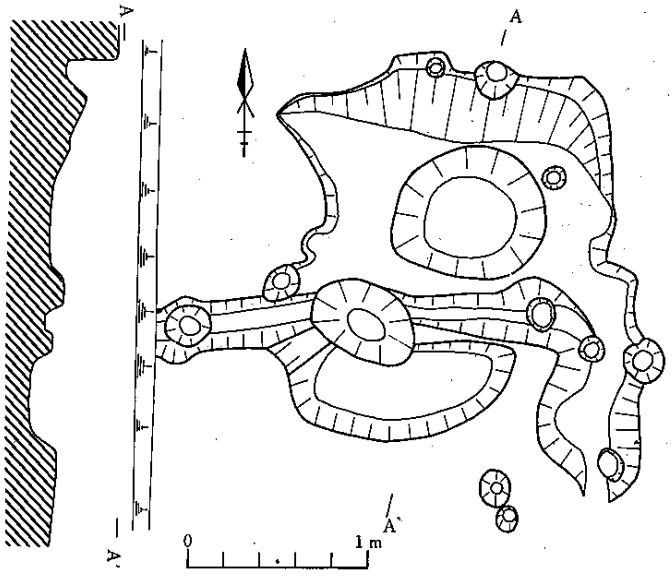
層位		土色	土性	備考
1a	耕作土	暗褐色（10YR 3/3）	砂質微砂	
1b		暗褐色　黒褐色	砂質微砂	
2		黒褐色（10YR 2・5/2）	砂質微砂	炭化物を含む　1層より粘質
3		暗褐色（10YR 2・5/3）	砂質微砂	炭化物を含む　12層より砂質
4	（地山）	褐色～黄褐色	砂質粘土～粘土質砂	

0　1m　2m

第4図　層位図（南北断面図）



第5図　土坑1



第6図　土坑2

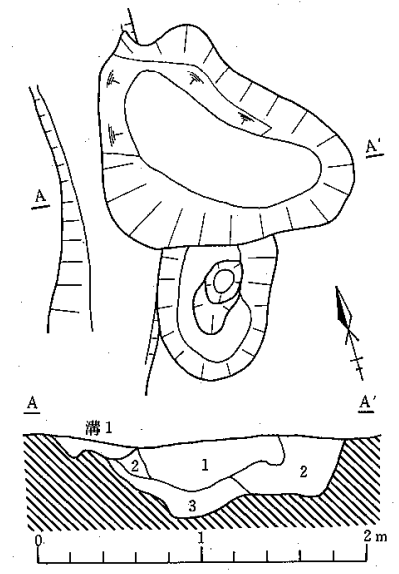
3. 発見遺構と出土遺物

土壙1（第5図）

第4層（地山）上面で、輪郭の半分が確認されたが、南への傾斜地であるため、南壁は確認できなかった。平面形は残存する壁および底面の状況からほぼ円形と推定される。壁高は高い所で35cm、壁の立ち上がりの角度は35～50度で、壁面はしっかりしている。底面はほぼ平坦で、赤褐色に酸化している部分が多く堅い。土壙の南端と推定されるあたりに浅い小ピット群があり、その一部は壁の両南端を結ぶように弧形に並び（ピット17～21）、土壙と関連がありそうである。土壙もピットも埋土は同じで、炭化物の多い黒褐色砂質である。出土遺物は、多数の土師器片、須恵器片および砥石（1点）である。

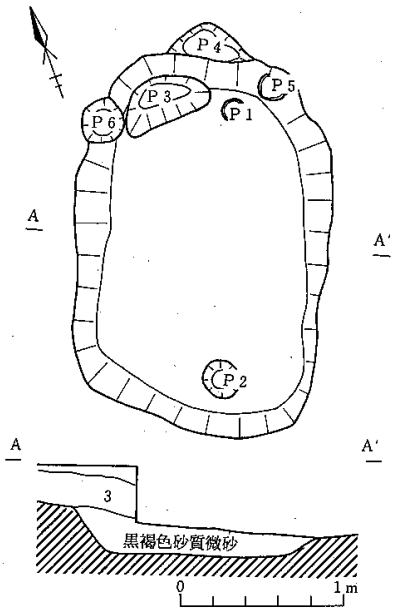
土壙2（第6図）

第4層（地山）上面で確認された。平面形は「コ」字状を呈し、南側が開き、中央部は東西にのびる溝になっている。土壙の北壁は、壁高17～28cmでゆるやかにたち、東壁は壁高13～20cmで垂直に近い。西壁は壁高3m位で内側に弯曲するが輪郭はあまりはっきりしない。底面は全体にしまりがなく軟らかい。埋土は単層で、炭化物を多量に含む暗褐色砂質土である。中央の溝



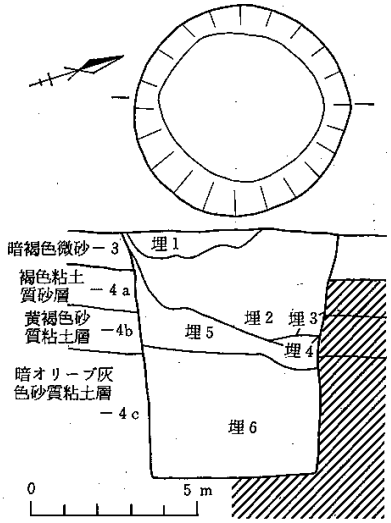
層位	土　　性
1	オリーブ褐色砂質粘土層
2	黒褐色砂質微砂層下部に褐色砂質の現を含む
3	褐色砂質微砂～粘土質微砂

第7図　土壙3



第8図　土壙4

は土壙の西側からのびてきて東壁の近くで浅くなり消失する。溝中には大小4個のピットがあるが規則性はない。溝の埋土は土壙の埋土と同じく炭化物を多量に含む暗褐色砂質土である。又、土壙内には溝の北側のピットは、平面が円形に近く、底面に酸化鉄がたまり堅くしまっている。溝の南側のピットは溝に沿って東西に長い長円形で、底面はあまりしまっていない。その他、壁にピットがみられるが規則性はみられない。土壙内からの出土遺物は多数の土師器片、須恵器片と丸瓦片（1点）である。なお、土壙中のピットからロクロを使用してない土師器の埦形土器片が出土している。



層位	土　性	色　調　と　備　考
1	砂質粘土	黒色に暗褐色が斑状に混入
2	砂質粘土	黒褐色に明黄褐色が斑状に混入
3	微砂質砂	黒色
4	微砂質砂	暗緑灰色
5	砂	緑黒色と暗緑灰色と明黄褐色とが相互に斑状に混入
6	砂質粘土	暗オリーブ灰色とオリーブ黒色とが斑状に混入炭化した草木類出土

第９図　井　戸

土壙3（第7図）

第4層（地山）上面で不整楕円の輪郭が確認された。壁、底面共軟弱で、底面はまるみを帯びている。土壙の西端は溝1によって切られている。

埋土は3層に分けられ、いずれも淡黄色ないし黒褐色粘土と微砂がブロック状に混在し不自然な堆積状況を示している。遺物の出土はない。

土壙4（第8図）

第4層（地山）上面で確認された。平面形は南北2m東西1.2mのほぼ長方形である。埋土は単層で、炭化物を多く含む黒褐色砂質土である。壁は北半分に於ては、壁高15～33cmで垂直に近い立ち上がりを示し堅くしっかりしている。南半分は壁高10～21cmで軟らかい。底面は北半分は酸化し、堅くしまっているが、南半分はしまりがなく軟らかい。土壙内には6個のピット（P_1～P_6）がある。P_1とP_2は南北に対をなし、P_1は直径約13cm、底面からの深さ約15cmでP_2は直径約23cm、底面からの深さ約17cmで共に壁の傾斜が垂直に近いしっかりしたピットである。P_3は平面がほぼ三角形で浅い。P_4は木の根による撹乱の可能性がある。ピット46は2層から確認され、この土壙よりも新しく掘り込まれたものである。出土遺物は多数の土師器片、須恵器片と砥石（2点）である。

井戸（第9図）

2層から確認された。上面の径約120cm、底面の径約100cm、3層上面からの深さ約150cmで

ほぼ円筒形に掘り込まれている。壁面、底面ともしっかりしている。埋土は軟らかい粘土と砂で、6層に細分される。埋土の下部には炭化した草木類が混じる。発掘中は、湧水のためかドロドロしたが、完掘すると湧水はなくなった。形状から井戸と推定したが、井戸枠等の施設は確認されなかった。出土遺物は須恵器坏の破片1点のみである。

溝1（第3図）

4層（地山）上面で確認された。2本の溝が発掘区の北西から東へのびてきて、約6.5mきたところで合わさり1本の溝になる。1本になった溝は、ほぼ直角に南に折れ、次第に浅くなりながら5m程いって土壙3の西端を切り、更に3m程行って止まる。北側の2本の溝は、共に幅40～80cm、溝の確認面からの深さ約40cmである。垂直に近い壁の途中には軽い段がみられ、壁の一部および底面に弱い酸化がみられる。溝が1本になつてからは幅約80cm、深さ確認面より約20cmほどで、壁の途中の段はなくなり、壁の傾斜も緩やかになる。溝の末端部では、壁、底面が明瞭に赤褐色に堅く酸化していた。底面は全体に凹凸があり、特に溝が1本になってからは顕著である。埋土は単層で暗褐色砂質土層であるが、溝の末端部にのみ灰色の砂が多く混入し、また溝が1本になる交点の底面直上には、薄い砂の堆積が認められた。出土遺物は多数の土師器片と須恵器片である。

溝2（第3図）

3層上面で確認された小さな溝である。溝1を切って東西に走り、西端に於て浅くなり消失する。溝の東端の範囲の確認を含めて、調査の際の不手際から精査できなかったが、検出できた部分において幅25～40cm、確認面からの深さは推定25cm前後でゆるやかな傾斜の浅い溝である。

ピット（第3図）

発掘区において遺構内を除き、大小60個のピットが検出された。2層よりピット59・60が確認され、3層よりピット13・46が確認されたほかは、すべて4層（地山）より確認されたものである。

ピット59・60－南北に並び、平面形は円に近く、底部は丸い。埋土の堆積状況は2つとも同じで、黒褐色ないし黒色の軟らかい砂質土である。ピット59の埋土3層では、砂がしま状に堆積していた。またピット60はピット46と重複し、ピット46の上部を切っている。ピット13・46－3層上面で確認された小ピットである。ピット13は壁付近に酸化鉄がみられ、木の根による穴の可能性もある。

その他のピット－4層（地山）上面で確認されたピットは、埋土はいずれも暗褐色砂質土であるが、その形状等から4類に分類できる。

ａ類

（ピット15、16、27、28）　掘り方と柱穴状の痕跡が確認されたピットである。この中でピット15・16は共に一辺約30cmの方形の掘り方をもち、形態が類似している。柱穴の掘り方確認面からの深さは共に約30cmである。溝1との関連も考えられるが断定はできない。

ｂ類

（ピット1～3･5～8･11、12、14、17～24、30、31、33、34、37、40、41、43～45、47、49、50～55）直径15～20cm、平面は円形で、確認面からの深さは20cm程度が比較的多い。（ピット17、18、19、20、23、24、28および52～54は確認面からの深さが10cm未満のものである）全ピットの中で最も数が多い。ピット17～21は土壙1に付随する可能性がある。その他のピットに於ては、相互関係は認められないようである。

ｃ類

（ピット9、10、35、36、38、39、56、57、58）平面が円形ないし不整円形で、径約40～60cmの浅いピットである。ピット10･56は底面に酸化鉄がみられ堅くしまっている。

ｄ類

（ピット4、25、26、28、29、32、42、52）ａ、ｂ、ｃの類別からはずれるものである。この中でピット42は、平面が方形に近く、壁、底面ともに比較的しっかりしている。

ピットについて

これら60個のピットは、いずれも規則性がなく、類相互の関連も認められない。遺物はＣ類のピット（ピット9、10、36、56、58）から土師器片（坏、甕）、須恵器片（坏、甕）が出土している。土師器の甕と須思器の坏の量が多い。ピット36出土の須恵器の坏にはロクロからの切離しが回転ヘラ切りのもの、土師器の坏には回転糸切りのものがみられ、ともに切離し後の調整はされていない。

4. 出土遺物とその考察

(1) 縄文土器と石器（第10図）

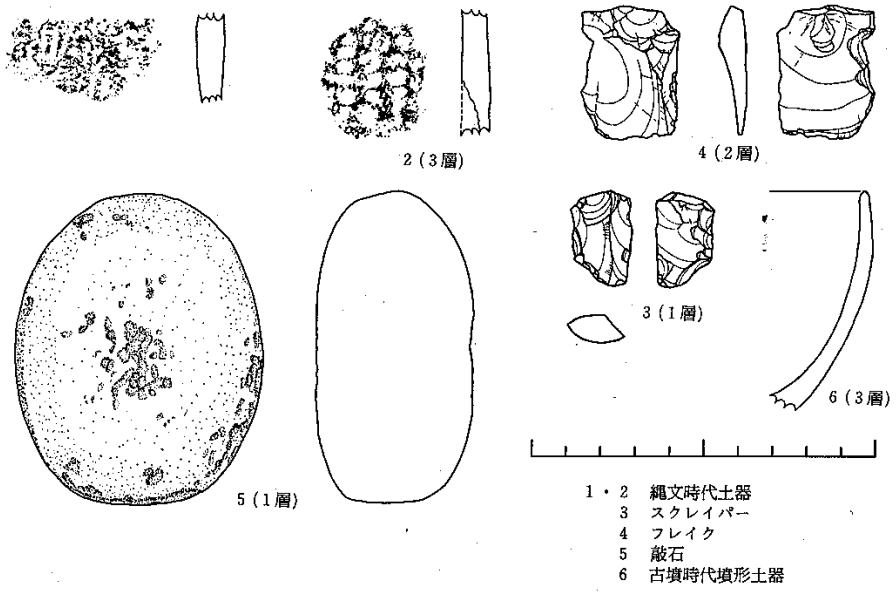
縄文時代の土器2点、石器･剥片3点が第1層、第2層、第3層から出土している。

縄文土器（第10図1.2）

表面に斜行縄文（ＬＲ1点･ＲＬ1点）が施された土器片が2点ある。器質はもろく、胎土に多量の繊維をふくむ。内面は平滑で、条痕はみられない。

スクレーパー･剥片（第10図3、4）

スクレーパーは両縁にあらい剥離を加え、刃部を調整している。磨滅が著しい。頁岩製であ



第10図　縄文時代・古墳時代の遺物

る。剥片は流紋岩製で調整はない。

敲石（第10図5）

長径9cm、短径7cm、厚さ4.6cmの河原石で、敲打痕が両面および周縁にみられるが、特に上端は敲打によって面が形成されている。

〈考察〉

縄文土器は、胎土に繊維をふくむこと、内面に条痕がないことなどの特徴から、前期初頭（上川名Ⅱ式あるいは大木Ⅰ式）[1]のに位置づけられる。スクレーパー、剥片、敲石もおそらく同時期のものであろう。

(2) 土師器

(1) 古墳時代の土師器（第10図6）

高坏脚部1点（第2層）と埦形土器片1点（第3層）、合わせて2点ある。いずれもロクロは使用していない。

高坏脚部片は、やや中ふくらみで、中空である。内外面にヘラケズリの痕跡がみられるが、全体的に磨滅しているため、こまかな調整は不明である。

埦形土器片は、体部から口縁部まで丸みをおびながら内弯する。内外面とも口縁に平行した丁寧なヘラミガキが施されている。

考察　高坏脚部の破片は形態からみて、南小泉式のものである（岩切鴻ノ巣遺跡の項参照）。しかし、埦形土器の型式は不明である。

(2)　ロクロ使用期の土師器

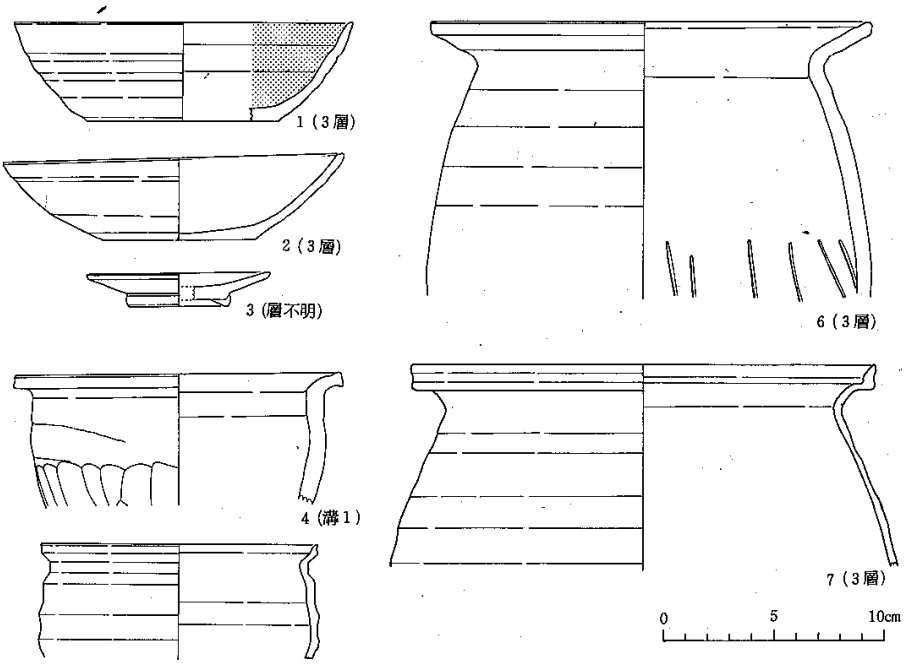
この期の土師器は須恵器とともに出土遺物の主体を占めるものであるが、完形品はない。復原実測の可能なものを基準にして分類を行なう。

坏（第11図1～3）

大部分が小破片で、実測図を作成できたものは3点しかない。すべてロクロ成形されている。小破片で磨滅がはげしいものも含まれているため、内面のヘラミガキ、黒色処理などの有無を区別することが困難である。従ってここでは、2類に大別することにした。

第1類（第11図1）内面はヘラミガキされ、黒色処理されているものである。ロクロからの切離しは回転糸切りによるものが多く、回転ヘラ切りされているものは少い。体部下端や底面を回転ヘラケズリによって調整しているもの、低い高台のつくものなどもごく少量みられる。
また内外面とも黒色処理されているものが1点含まれる。

第2類（第11図2、3）　ロクロ調整痕が内外にみられるもので、ヘラミガキや黒色処理などが行なわれていないものすでてを含めた。ロクロからの切離しは回転糸切りによるものが多



第11図　土師器

い。小形で高台付もある。この第2類は第1類より数が少ない。

甕（第12図6、7）

小破片が多く、全体を復原実測できるものはなかった。大形の口縁部破片をみると、頸部で「く」の字形にくびれ、口縁部は外反するものが多い。口縁部は「コ」の字形を呈するものと、口縁上端が上にのび、断面三角形に近いものとが多い。しかし、小破片ではその他の形態も若干含まれる。また大形品で胴の最大径が口径より広く、長胴の形になるものが多いようである。口縁部破片では内外面ともロクロや横ナデによって調整されている。

体部破片をみると、外面にはロクロ痕（あるいは横ナデ痕、、刷毛目、ヘラケズリ、叩き目が、内面にはロクロ痕（あるいは横ナデ痕）、刷毛目、ヘラミガキされ黒色処理をうけているものなどが観察される。組合せは内外構ナデ（あるいはロクロ調整痕）が最も多く、次いで外面ヘラケズリで内外構ナデ痕というのが多い。大形の破片をみると、体部上半はロクロ調整で下半は縦のヘラケズリをうけているものが多いようである。内面がヘラミガキされ黒色処理されている例は少ない。

底部をみると、痕跡不明のものが圧倒的に多く、次いで回転糸切り痕をのこすものが多い。その他、木葉痕、ヘラケズリをうけているものが若干ある。

考察　これらの土師器はいずれもロクロを使用している点から平安時代のものと推定される。坏第1類および甕は器形･調整などの特徴から東北地方における土師器編年の表杉ノ入式と考えられる。坏第2類はロクロを使用している点からすれば表杉ノ入式に含まれるのかも知れないが、切離し後の調整がみられず、赤焼土器あるいは須恵系土器といわれているものに近く、平安時代でも後半に降る可能性がある。

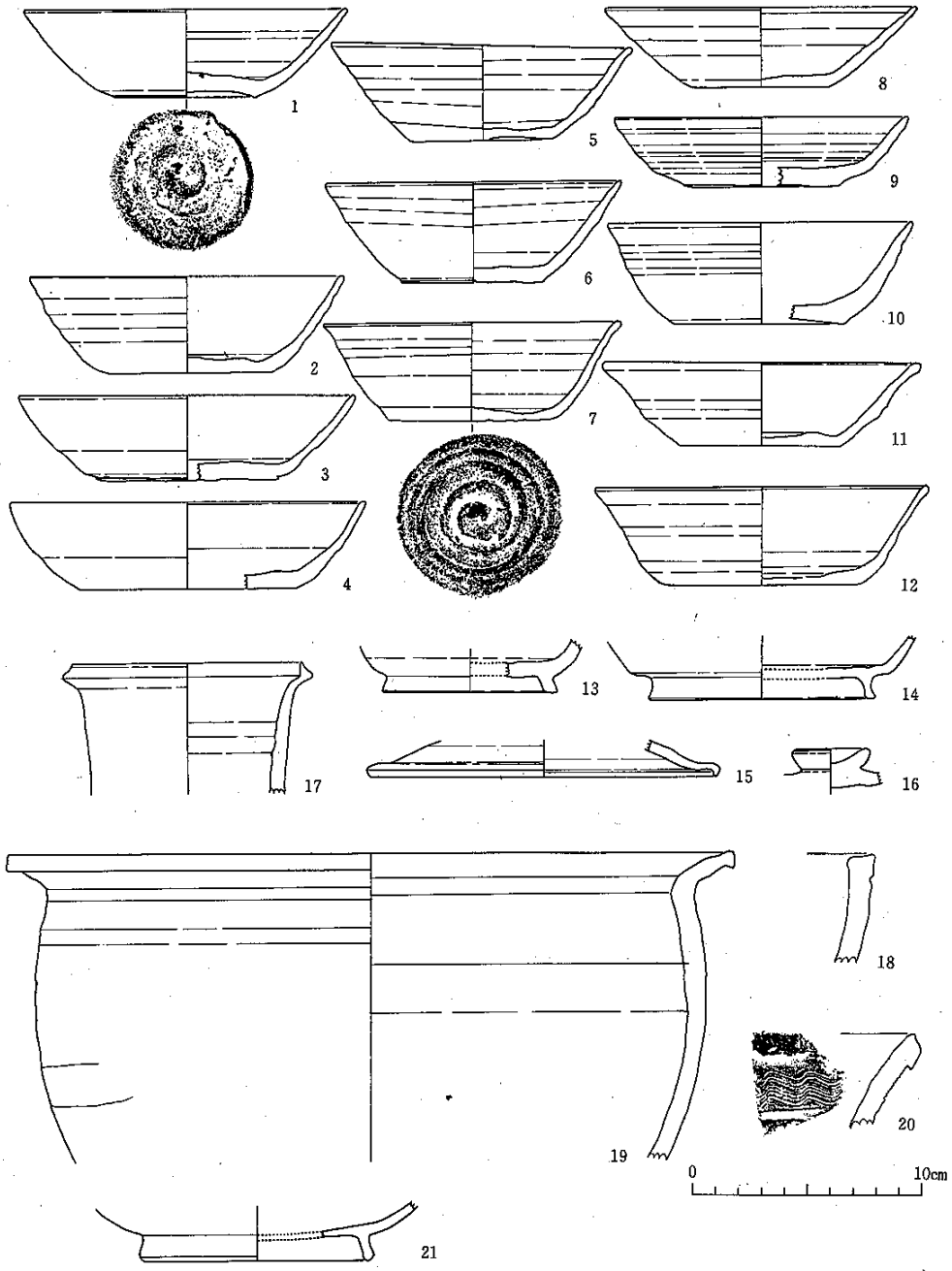
(3) 須恵器（第12図）

須恵器は土師器同様量的には多いが完形品はない。復原実測の可能なものを基準にして分類を行なうことにする。

坏（第12図）

器高の低い皿形に近い器形をし、すべてロクロによって成形され、平底である。底部の状況によって分類される。

第1類（第12図1～7）　ロクロからの切離し方法が回転ヘラ切りで、底面に一定幅の渦巻状の痕跡をのこし、体部下端や底部に切離し後の調整が加えられていないものである。底部は中央部（渦巻の中心部）がやや高まるのが特徴であるが、わずかに上げ底風になるものもある。
体部から口縁部かけてはわずかに内弯するものが多いが、直線的に広がるものや、口縁部がわずかに外反するものなどもある。



第12図　須恵器・灰釉陶器

第2類（第11図8、10、11）　回転糸切りによってロクロから切離され、その後の調整が施されていないものである。体部から口縁にかけて直線的に広がるものと、わずかに外反するものなどがある。

第3類（第11図9）　第2類と同じく回転糸切りによってロクロから切り離されているが、底部周縁はその後に手持ちのヘラケズリによって調整されているものである。口径にくらべて底径のかなり小さいことが特徴である。

第4類（第11図12）　底部全面が回転ヘラケズリによって調整され、ロクロからの切離し方法が不明のものである。口縁部はやや外反気味である。

その他（第3類、第4類を含む）　体部下端に回転ヘラケズリや、手持ちヘラケズリの調整がみられるものがある。しかし、小破片のため、それが部分的なのか全面におよぶのかを知ることができない。従って、ここでは無理して類別しないことにした。

台付坏（第11図13、14）

数点出土している。すべて小破片である。高台を付ける際のナデ調整のため、切離し方法やヘラケズリの有無は不明のものが多く、回転ヘラ切りのものが1点みられるのみである。高台が底部周縁より内部につくもの（第11図14）と底部外周につくもの（第11図13）とがある。高台先端はやや肥厚するものがほとんどで、いずれも端部を水平におさめている。

蓋（第11図15、16）

全て小破片で数も少ない。口縁部片5点、天井部片1点、つまみ1点、合計8点が3層および溝2・ピット9より出土している。口縁部は薄手で端部が断面三角形状に短かく下方に折り曲げられているもの（第11図15）や、端部がやや外方をむくもの、および厚みのある端部が短かく下方に折り曲げられているものがある。天井部の外側上半には、回転ヘラケズリ調整がみられる。他は内外共ロクロ調整されている。つまみは、中央がくぼんだ高さ1cmほどのものである。

壺（第11図17）

口頸部の破片が少量ある。破片が小さいため、甕の口縁部と区別しにくい。色調は黒灰色系のものと灰白色系のものとに分かる。自然釉のついているものが多く、それ以外でも灰状のものが付着したり、光沢をもつものが多い。灰白色系のものは胎土がキメ細かく焼成も良好で東海産の可能性がある。

甕（第11図20）

小破片が多く、全体を復原実測できるものはなかった。口縁部の破片をみると、頸部が外反し、口縁端が断面三角状になるものと「コ」の字形（箱形）になるものなどがある。まれに頸部に波状文をもつものもある（第11図20）。体部は壺のそれと区別しにくい。外面にはロクロ

痕（あるいは横ナデ痕）、叩き目、刷毛目、ヘラケズリ痕が、内面にはロクロ痕（あるいは横ナデ痕）、刷毛目、アテ目（青海波文）などが観察される。大形の破片でみると、体部上半はロクロ痕、下半は縦のヘラケズリ痕のものもある。底部は回転糸切り痕が観察されるものがあるが、多くは不明である。また高台のつく破片があるが、甕のものではなく、壺の可能性がある。

鉢（第11図18）

口縁部破片が1点ある。小破片のため口縁部の断面図のみを示す。内外面ともロクロ調整痕がみられる。体部と底部については不明である。

考察　これらの須恵器の所属時期については不明な点が多いが、おそらく平安時代に属するものと思われる。ただし坏第1類など平安時代よりやや古い時期に属する可能性をもつものもある。

(4) 灰釉陶器（第11図21）

3層より1点出土した。高台付坏の底部破片である。高台部を除き、内外面とも淡緑色の粕がかけられている。釉のつき具合から、重ね焼きが行なわれているらしい。胎土はキメ細かく、黒い粒が若干含まれている。焼成は良好であり、薄手である。時期は不明である。

(5) 瓦（第13図）

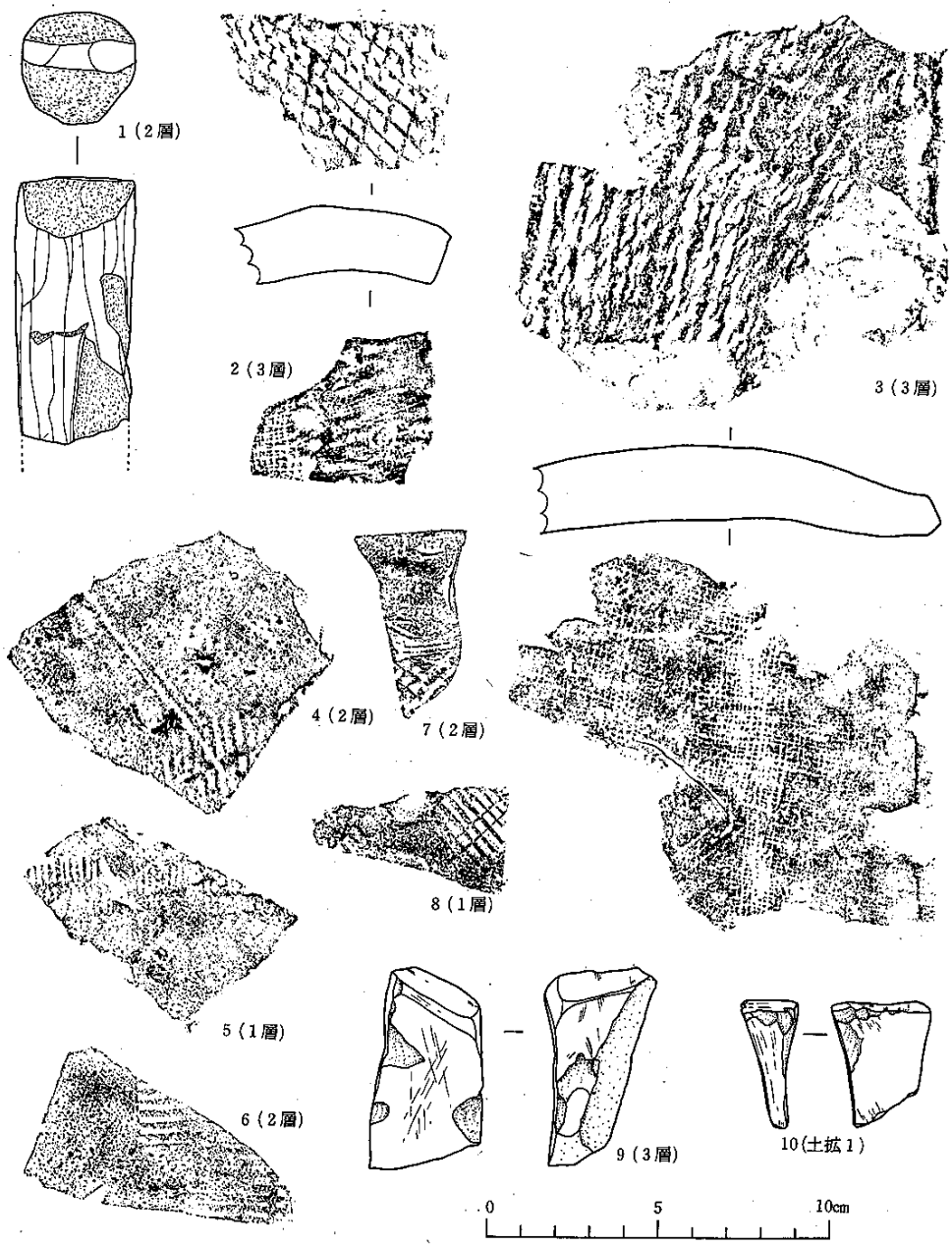
平瓦4点と丸瓦10点、合計14点の瓦か出土している。平瓦は2、3層から出土し、図示した3層出土の2点が比較的よく形態を残している。第13図2は凸面に格子状叩き目を、凹面に布目を残し凹面の側面近くには糸切痕がみられる。胎土に砂粒をほとんど含まず、焼きがよく灰白色で堅くしまっている。第13図は凸面に縄叩き目を、凹面に布目を残す。胎土に砂粒を少し含み、青灰色で焼きは良い。他に2層から凹凸両面にスリ消しのものが出土し、揚土に凸面に縄叩き目、凹面にスリ消しのものがある。丸瓦は1、2、3層および土壙2埋土より出土した。いずれも凸面にナデ調整、凹面に布目を残す小破片である。火を受けて浅黄色化したものが5点あり、その中に玉縁部の破片が1点みられた。

考察　2の平瓦はその特徴から多賀城第1期のものの中で軒平瓦・512、513とされているもの[(2)]に伴う平瓦に類似している。他のものは多賀城跡の出土品に類似し、[(3)]奈良～平安時代にかけてのものとして良いであろう。恐らくは多賀城か、周辺の瓦窯跡から運びこまれたものであろう。火を受けているものが$^{1}/_{3}$を占めているのは注目される。

(6) 土製支脚（第13図1）

破片が1点、2層より出土している。直径約3cm、現存最大長7.5cmの円筒形で、外全面および端部の一部にヘラケズリがみられ若干、面とり状を呈する。淡橙色で焼成は良好のものである。所属年代は不明である。

(7) 砥石（第13図9、10）



1　土製支脚
2・3　瓦
4～8　中世陶器押印
9・10　砥石

第13図　支脚・瓦・中世陶器・砥石

1、2、3層から1点づつ、土壙1から1点、土壙4から2点、合わせて6点出土している。いずれも破片である。1層出土の石材は不明で淡赤褐色のもの以外は、全て凝灰質シルト岩製で、緑がかった灰白色のものである。10は土壙1出土で、幅2.6㎝、高さ1.6㎝、現存最大長35㎝と小形である。破損面を除く平坦部5面は使用されており、滑らかである。2面がよく使用され、くぼんでいる。9は3層出土のもので、現存の2面とも使用されている。なお、2層出土のものに、火を受けたものか赤化し、剥離のみられるものが1点ある。

これらの砥石がいずれの時期に属するかは不明である。金属の刃物を研ぐのに使用されたのであろう。

(8) 鉄製品および鉄滓

鉄製品27点、鉄滓7点である。溝2の埋土から1点出土している以外は、殆んど1層～2層より出土している。

鉄製品は、錆と砂が堅く付着しており、丸味を帯び、原形が不明で実測図を作成することができなかった。形態は、細長い針状のものが18点で、そのうち現存長10～13㎝のものが2点、6.5～7.5㎝のものが4点、4～6㎝のものが9点、2㎝のものが2点となっている。その他には、鏃のようなもの1点、径4.8㎝の円盤状のもの1点、「L」字状のもの2点、錆が多く、塊状で不明なもの3点となっている。

(9) 中世陶器（第13図4～8）

1、2層より25点出土している。すべて大甕の破片である。口縁部破片はふくまれない。全体に赤褐色系の色調をもつものが多い。なかには、黄緑色の自然釉が部分的にみられるものもる。押印をもつものがあり、格子目等がみられるが、いずれも小破片のため、押印の分類や正確な時代を決定することができなかった。

(10) 施釉陶磁器

近世以降のものと思われる施釉の陶磁器の小破片が5点ある。詳細は不明である。

5. 遺構と包含層についての考察

遺構の考察（表1）

＜土壙の性格＞

土壙3は自然堆積と思われない堆積状況を示すが、積極的に性格を決定づけるものはない。土壙1、2、4に於ては以下の共通性がみられる。①ほぼ平坦な底面をもつ。②壁高は約10～35㎝である③底面にピットがみられる。④埋土は暗褐色および黒褐色の砂質土で単層である。⑤埋土に多くのロクロ使用期の土師器片、須恵器片を含む。

第1表　遺構の土師器・須恵器分類表

遺物＼遺構			土壙1	土壙2	土壙3	土壙4	溝1	溝2	井戸	P9	P10	P36	P56	P58	
須恵器	坏	口縁部	5	10		8	13	3		1	2	2		5	49
		体部	7			4	8	1	1			1	1	3	26
		底部	8	2		12	17	2				1			42
		計	19	12		24	38	6	1	1	2	4	1	8	116
	蓋	口縁部					1								1
		天井部								1					1
		つまみ													
		計					1			1					2
	壺	口縁部	1			1									2
	鉢	口縁部													
	甕	口縁部		1			1						1		3
		体部	5	3		8	19	3							38
		底部													
		部位不明										1			1
		計	5	4		8	20	3				1	1		43
須恵器計			25	16		33	59	9	1	2	2	5	2	8	162
土師器	坏 第1類	口縁部				2	3								5
		体部	3			6	4							1	14
		底部				1	2								3
		部位不明		1		1						2			4
		計	3	1		10	9					2		1	26
	坏 第2類	口縁部				1(?)									1
		体部													
		底部					1(?)	1				3			5
		計				1(?)	1(?)	1				3			6
	甕	口縁部	2	1		2	3	2				1		1	12
		体部	22	34		28	23	3		19		2		1	122
		底部	2			2	3								7
		部位不明											1		1
		計	26	35		32	29	5		19		3	1	2	152
土師器計			29	36		43	39	6		19		6	1	3	182
総計			54	52		76	98	15	1	21	2	11	3	11	346

須恵器底部分類表

	土壙1	土壙2	土壙3	土壙4	溝1	溝2	井戸	P9	P10	P36	P56	P58	
第1類	2			1	4					1			8
第2類	5	1		8	6								20
第3，4類，その他	1※	1		3	3※	1							9
付高台					1								1
不明					3	1							4
計	8	2		12	17	2				1			42

※付高台のものを含む。

注(1)　土師器坏の非内黒とした中には，内黒が脱色したものが含まれている可能性がある。

第2表　包含層　土師器　須恵器（ロクロ使用期）分類表

遺物＼遺構				1　層	2　層	3　層	
須恵器	坏		口縁部	5	76	117	198
			体　部	10	99	95	204
			底　部	12	89	129	230
			計	27	264	341	632
	蓋		口縁部		2	4	6
			天井部			1	1
			つまみ			1	1
			計		2	6	8
	壺		口頸部		8	5	13
	鉢		口縁部		1		1
	甕（壺を含む）		口縁部		14	9	23
			体　部	49	154	158	361
			底　部	1	6	2	9
			計	50	174	169	393
須恵器合計				77	449	521	1,047
土師器	坏	第1類	口縁部	3	50	29	82
			体　部	13	79	54	146
			底　部	5	21	24	50
			計	21	150	107	278
		第2類	口縁部	50	22	15	42
			体　部	3	17	7	27
			底　部	1	7	5	13
			計	9	46	27	82
	甕		口縁部	18	42	42	102
			体　部	207	540	331	1,078
			底　部	5	45	26	76
			計	230	627	399	1,256
土師器合計				260	823	533	1,616
総計				337	1272	1,054	2,663

須恵器底部分類表

	1　層	2　層	3　層	
1　類	2	13	24	39
2　類	10	18	44	72
3類，4類，その他		8	13	21
付高台			3	3
不明		50	45	95
計	12	89	129	230

注(1)第1，2表共、口縁から底部まで遺存する坏は底部をもって集計した。
(2)第1，2表共、破片は著しく小さいものまで含めてある。

この中で土壙4は、2×1.2mの長方形を呈しほぼ定形であり、また長軸に対をなす2つのピットを有する。しかし土壙1～4については積極的に性格を決定づけるものはない。

＜溝の性格＞

溝1、溝2についてもその性格は明らかでない。溝の末端部で壁、底面が赤褐色に酸化し、灰色砂の混入がみられることから水が流れた跡である事は推定されるが、発掘区全体に於て、溝1の遺構確認面である4層に弱い酸化が多くみられる事からみても、それが本来の目的であったと断定する事はできない。

＜土壙1、4および溝1の年代＞

土壙1、4および溝1は埋土が単層であり、おのおの須恵器坏第1類（回転ヘラ切り、非調整）、第2類（回転糸切り、非調整）が主体を占め、土師器坏第1類（ロクロ成形で内面黒色処理されている）がみられ、かつこれらが遺物中の年代の下限を示すことから平安時代のものと思われる。須恵器坏第2類と土師器坏第1類の出土した土壙2も同様と思われる。

包含層の遺物と性格（表2、表3）

2、3層は須恵器、土師器（すべて破片）を多量に含む遺物包含層である。2、3層における遺物は以下の共通性がみられる。(1) 器形別にみた場合多い順に土師器の甕、須恵器の坏、須恵器の壺が出土した。(2) 須恵器坏は第1類、第2類が主体を占め、第3類、第4類も少量出土している。(3) 土師器の坏は第1類が多く、第2類も少量含まれる。また2、3層に共通する以上の土器の在り方は、土壙1、土壙4および溝1出土土器の在り方と同一であり、土壙2のそれとも近似している。しかし土器以外の遺物をみると2層には中世陶器が含まれるが3層では中世以降の遺物は含まれない。以上のことに土器が全て破片であり、傾斜地の下端に位置することを考えれば2層は中世以降の2次堆積の可能性が強い。

遺物＼層位遺構		1層	2層	3層	土壙2	土壙1	土壙4	溝2	計
縄文土器				2					2
石器		1							1
剝片			1						1
敲石		1							1
高坏脚部(土師器)			1						1
椀形土器（〃）				0.5 ―― 0.5					1
支脚（土製品）			1						1
瓦	丸瓦	1	3	4	1				9
	平瓦	1	1	2					4
灰釉陶器				1					1
砥石		1	1	1		1	2		6
鉄製品		21						1	22
鉄滓		10							10
中世陶器		8	17						25
近世以降陶磁器		8	3※						11

※1層に含まれる可能性もある。

6. まとめ

遺物は表土（第1層）、包含層（第2、3層）および遺構埋

土中から多数の須恵器、土師器が出土した。大部分は平安時代のものと推定される。須恵器の量が多いのは注目される（3層ではほぼ土師器と同じ比率）。その他、縄文土器片（前期初頭）、石器、敲石、瓦片（奈良・平安時代）、土製支脚、砥石、鉄製品および鉄滓、灰釉陶器片、中世陶器片、近世以降の陶磁器片が少量出土した。

遺構は2層上面より井戸1基、3層上面より溝1本（溝2）、4層（地山）上面より土壙4基（土壙1～4）、溝1本（溝1）が検出された。性格はいずれも不明であるが、土壙1、2、4および溝1は、遺物等の検討から平安時代の遺構と推定される。

さらに、富谷丘陵から流れ込む渓谷の出口付近に位置する水の便の良さ、南向き緩斜面という立地条件は、4 層（地山）上面で検出された土壙 1、2、4 および溝 1 が平安時代における集落を構成する一部分であり、また発掘区の北側に集落の主体が延びるている事が予想される。

また多賀城出土の瓦と類似する瓦片の出土は沢乙遺跡が多賀城のある小丘陵と利府耕土を介して向いあう丘陵の縁辺に立地していることを考えあわせると、多賀城との関連が考えられよう。須恵器の量の多さもそれと関連するのかも知れない。

付記

本遺跡の調査に御協力いただいた方々および機関は下記の通りである。深く感謝の意を表したい。

調査協力機関

利府町教育委員会、伊藤組

協力者

鈴木春治、鈴木清之助、鈴木清悦、長南定吉、佐藤栄世、仁村俊明、赤城保憲、鈴木敏、斉藤和彦、柿哲夫、長谷川明彦、宇城将光、山内晃、高橋わくり、菊地礼子、鈴木あさよ、鈴木孝子、鈴木悦子

註

⑴ 加藤孝「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論集　昭 26

⑵ 岡田茂弘他「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970 多賀城跡－昭和 46 年度発掘調査概報－」宮城県教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所

⑶ 東北歴史資料館準備室の工藤雅樹氏、多賀城跡調査研究所の御教示による。

(7) 中ノ茎A遺跡

遺跡所在地：栗原群高清水町中ノ茎
調 査 期 間：11 月 5 日～11 月 22 日
調 査 面 積：約 6,000m^2
発 掘 面 積：約 1,200m^2
遺 跡 記 号：ＣＢ

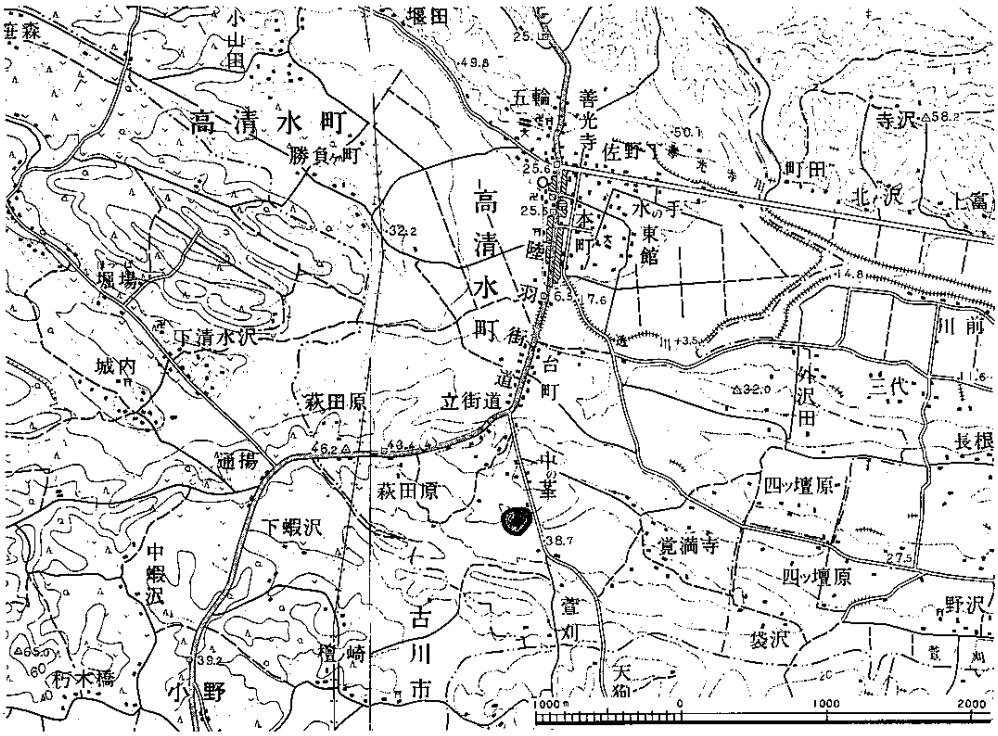
1. 遺跡の位置と立地（第1図）

中ノ茎Ａ遺跡は栗原郡高清水町中ノ茎にあり、高清水町の中心部（役場）の南方約2.5kmに位置する。

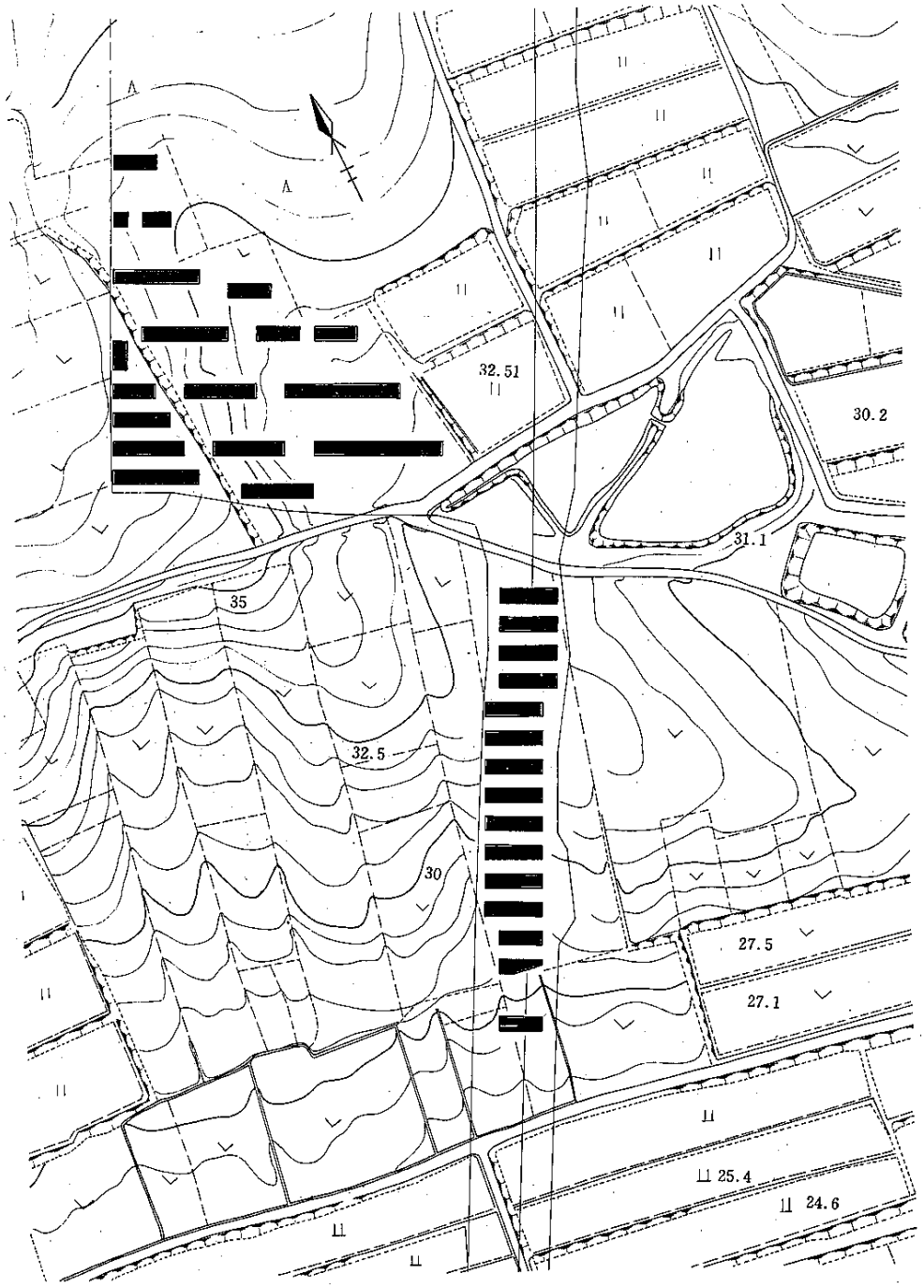
古川市を中心として広がる大崎平野の北部には、西から東に長く箆岳丘陵がはしり、さらに枝分れして多数の台地を形成している。中ノ茎Ａ遺跡は、これらの台地のひとつ、高清水町中ノ茎地区を中心にして広がる台地上に立地している。この台地は東西に長く、東部には浅い谷が入りこんで二又に分れる。遺跡は谷の奥部から南側斜面にかけて広がっており、現在は畑地として利用されている。調査地点の標高は約29～37m、南側の水田面との比高は2～10mである。

なお、本遺跡の北部には杉や松の林があり、遺物の表面採集は不可能である。しかし、この林は遺物の散布する畑地と地続きで立地条件も同じである所から遺跡の範囲にふくまれる可能性が充分あった。

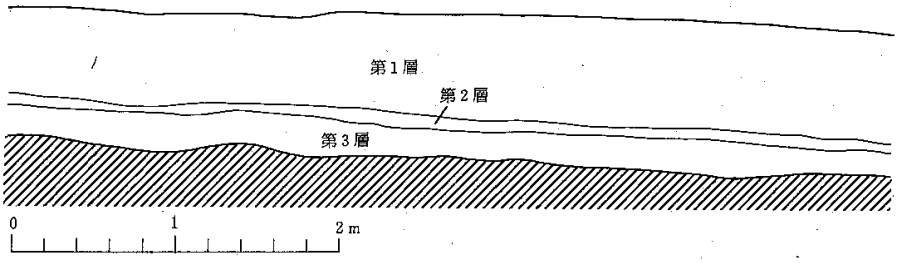
また、遺跡の北約1kmの所に昭和49年度調査予定の中ノ茎Ｂ・Ｃ・Ｄ・と仮称している3遺跡がある。



第１図　遺跡の位置（古川：５万）



第２図　グリッド配置図



第３図　ＡＫ・ＡＬ48区北壁セクション

2. 調査の経過（第2図、第3図）

新幹線路線敷と同変電所用地の一部を合わせた約6,000㎞の畑地を調査対象とした。前述した松や杉の林も変電所用地にふくまれるが、この地域は畑地の調査結果に基づいて検討することにして調査を開始した。

調査は、まず路線敷の幅杭を基準にして調査区全体に3mのグリットを設定し、そのうち73グリット約1,200m^2を発掘した。

基本的な層位は、路線敷内では第1層（表土）・第2層（黒色土）・第3層（黄色砂質土・地山である）となる。第2層は谷の部分にのみみられる。変電所用地内では、第1層（表土）・第2層（暗褐色土）・第3層（黒色土）・第4層（黄色砂質土）である。但し西部の谷を登った地域では第2層と第3層はみられない。

発掘の結果は、少量の土器片が発見されたのみで、遺構は検出されなかった。従って、変電所敷地内の林については調査しないことにした。

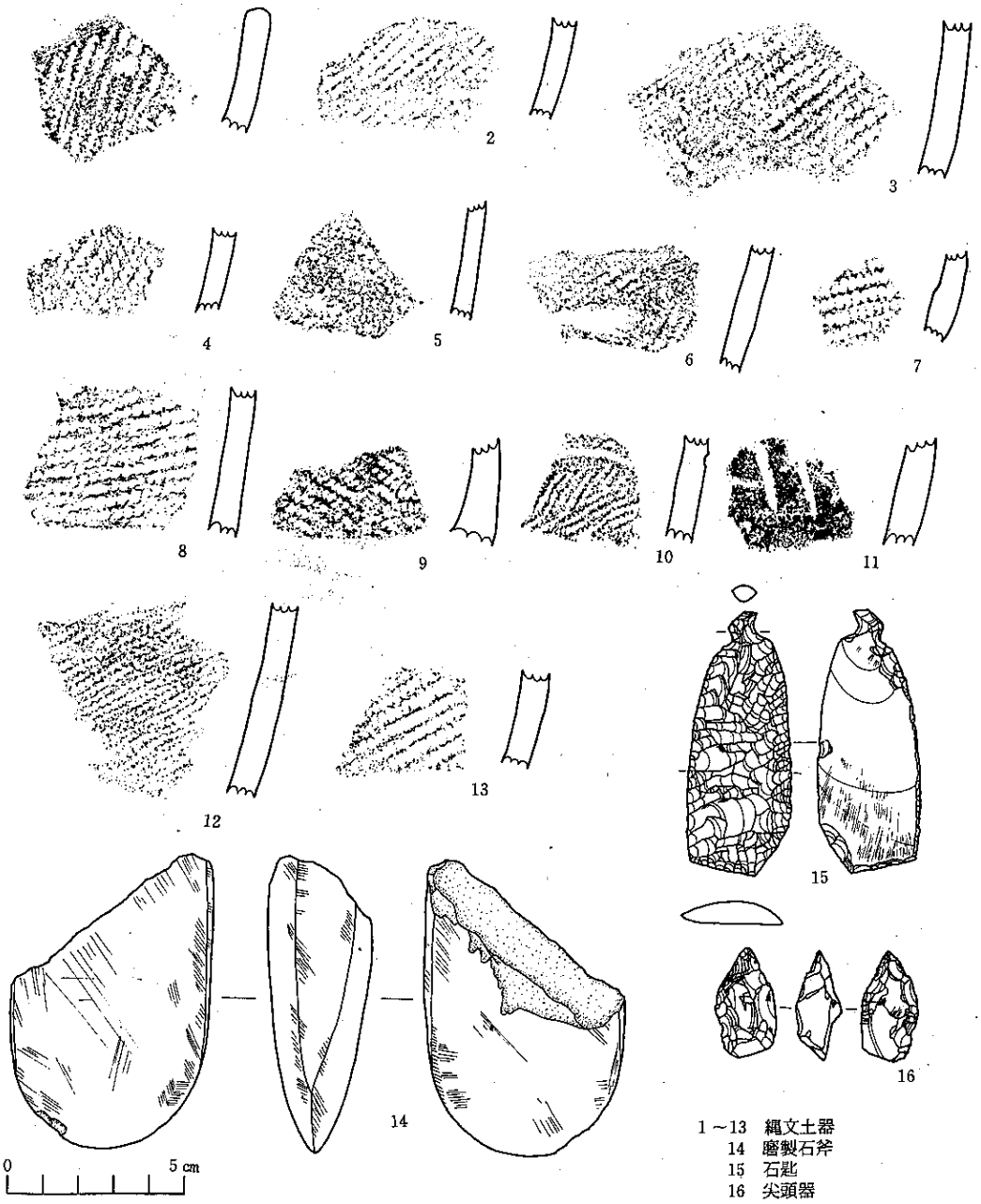
3. 出土遺物（第4図）

発掘した面積にくらべ遺物は非常に少ない。

〈土器・陶器〉

縄文土器22片・土師器5片・須恵器3片・中世陶器5片・近世陶器と思われるもの3片・不明のもの5片・合わせて43片である。いずれも小破片で実測図に表現できないので、縄文土器のみを拓本で示した。

縄文土器は、原体ＬＲの斜行縄文が施文されている。中期末から後期にかけての深鉢の破片と思われるが、確実な年代は不明である。



第４図　出土遺物

また土師器片の中には、底部に回転糸切り痕を残し内面黒色処理された坏がある。平安時代のものと思われる。須恵器片の中には、庭部にへら切り痕のみられるものもある。

中世以降の陶器については、特徴的なものがないため、具体的なことはわからない。

〈石期〉

磨製石斧・石匙・掻器がおのおの1点ずつ、合計3点出土している。縄文土器に伴ったものであろう。

磨製石斧　破片で刃部と体部の一部が残存している。刃部は丸味をおび、体部側面には明瞭な稜線が認められる。泥岩製で、現存長8.2cm、幅5.6cm、厚さ2.8cmである。

石匙　縦長の剥片を用い、一面に全面加工を施し、裏面は下端と一方の側面に細かい刃部加工をしている。つまみがあり、くびれの部分は両面に細かい剥離が加わり、バルブを消している。頁岩製で、長さ7.5cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmである。

掻器　ぶ厚い剥片を用い、両面に荒い剥離を加え、一方の先端を鋭くしている。石錐あるいは、石鏃の未製品かもしれない。鉄石英製で、長さ3.0cm、幅1.6cm、厚さ1.1cmである。

4. まとめ

中ノ茎Ａ遺跡は、分布調査の際にかなりの遺物が表面採集され、集落としての立地条件も良好と思われた。しかし、発掘の結果は、遺構は検出されず、出土遺物もごく少ない。ただし、縄文時代・古代・中世以降の遺物が少量ずつ出土しているので、付近にこれらに関連する遺構の存在が考えられる。

付記

発掘調査にあたっては下記の方々にご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。

調査補助員

柳瀬和幸・斉藤　庸

地元協力員

今井隆・今井長人・今野賢治・佐藤定夫・菅原次雄・千葉四十三・梅崎喜市・操臣六
今井はるみ・斉愛子・清水円子・高橋いくよ・高橋ゆき子・高橋いさ子・堀越はま子
村松スエコ